

# 法然の『往生要集』観

梯 信 暁

はじめに

醍醐本『法然上人伝記』によると、法然（一一三三～一二二二）は『往生要集』を先達として浄土門に入ったと言われている<sup>(1)</sup>。法然が十八歳の時、師事していた皇円（～一一六九）のもとを去って黒谷青龍寺に入ったのは、観空（～一一八二）から『往生要集』の教えを受けるためだったと思われる。

『法然上人行状絵図』巻六には、観空の『往生要集』の講義に法然が列席した際の出来事を伝える記事が見える。席上法然が、「往生の業には、称名にすぎたる行、あるべからず」と言ったところ、観空は観仏が勝れていると教えた。法然が反論すると観空は、「先師良忍上人も、観仏勝れたりとおほせられしか」と答えた。すると法然が、「良忍上人もさきにこそむまれ給たれ」と言ったので、観空は立腹した。それでも法然は食い下がり、「善導和尚も、へ上

来、定散二善の益を説くといへども、仏の本願に望むるに、意、衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるにあり（『観経疏』「散善義」、『大正蔵』三七、二七八頁上）と釈したまへり。称名すぐれたるといふことあきらかなり、聖教をば、よくよく御覽たまはで」と言ったと述べられている<sup>(2)</sup>。

同様の逸話が、覚如（一二七〇～一三五二）の『拾遺古徳伝』巻三にも伝えられている。観空が『往生要集』の講義の中で、観仏・称名の中、観仏が勝れていると教えた。すると法然が末座にあつて異議を唱え、序文の「念仏の一の門に依つて」という文言は称名を指すと主張したので、観空は立腹し、「こさかしき小僧かな」と木枕を投げつけたというのである<sup>(3)</sup>。

この話の中で法然は、末座にあつて「小僧」と呼ばれている。よつて入門したばかりの頃という設定で、その時すでに法然が、称名念仏の専修による往生浄土法門の樹立を確信していたことを示唆する逸話である。その真偽はともかく、後に法然は確信の証左として

善導『観経疏』『散善義』就行立信釈(『大正蔵』三七、二七二頁中)の文に出遇い、選択本願念仏の教理を組織することになる。それが『往生要集』の研鑽によって導かれた思想であることは間違いない。

法然作とされる『往生要集』の註釈書が四部伝わっている。了慧道光(一二四三〜一三三〇)編『古本漢語燈録』卷六所収の『往生要集釈』『往生要集略料簡』『往生要集料簡』『往生要集註要』である。その成立の時期や順序については諸説あつて確定していない。

本稿では、四部中最も大部である『往生要集釈』を取り上げ、ここに示された法然の『往生要集』観について教理学の立場から検討を加えたい。『往生要集釈』の中で法然は、『往生要集』には「広・略・要」の三つの読み方があると述べている。その思想構造を解明することが本稿の目的である。

まず概略を述べておきたい。「広」とは、三卷十門の全体を通読して『往生要集』を理解する立場である。ここに法然は、厭離穢土・欣求淨土以下十門の標題と、各門に配された諸項目の名称とを列挙するのみで、私見は述べていない。十門の全体を文脈に沿って、自分の見解を交えずに理解するということであろう。これについては特に検討の必要はない。

それに対し「略・要」には、法然の理解に基づいて『往生要集』を読む方法が示されている。「略」とは、大文第五「助念方法」の第七「総結要行」の釈意に依拠して『往生要集』の全体を理解する

立場、「要」とは、大文第四「観察門」、大文第八「念仏証拠」、大文第十「問答料簡」の第二「往生階位」の釈意に依拠して『往生要集』を理解する立場である。以下この二つの立場について検討したい。

### 一 「略」について

「略」の立場を示すに当たり法然は、「また略とは、助念方法の中の総結要行の七法これなり<sup>(4)</sup>」と言う。『往生要集』「総結要行」の全文は次の通りである。

第七に総結要行とは、問ふ。上の諸門の中に陳ぶるところすでに多し。未だ知らず、何の業をか往生の要となす。答ふ。大菩提心と、三業を護ると、深く信じ、誠を至して、常に仏を念ずれば、願に随ひて決定して極樂に生ず。いはんやまた余の諸の妙行を具せんをや。

問ふ。何がゆゑぞ、これらを往生の要となす。答ふ。菩提心の義は、前につぶさに釈するがごとし。三業の重悪はよく正道を障ふ。ゆゑにすべからくこれを護るべし。往生の業は念仏を本となす。その念仏の心は、必ずすべからく理のごとくすべし。ゆゑに深信・至誠・常念の三事を具す。常念に三の益あり。迦才(『浄土論』卷上、『大正蔵』四七、九〇頁上)の云ふがごとし。「一には諸悪の覚観、畢竟して生ぜず。また業障を消すこ

とを得。二には善根増長し、また見仏の因縁を種うることを得。三には薰習熟利して、命終の時に臨みて、正念現前すと<sup>5)</sup>。業は願によりて転ず。ゆゑに随願往生といふ。総じてこれを言はば、三業を護るは、これ止の善なり。仏を称念するは、これ行の善なり。菩提心および願は、この二の善を扶助す。ゆゑにこれらの法を往生の要となす。その旨経論に出でたり。これをつぶさにすることあたはず。<sup>5)</sup>

ここに源信は、『往生要集』冒頭より提示してきた念仏修行の肝要を問い、答えて、「大菩提心を発すこと、身・口・意の三業を正しく制御して悪を作らないこと、仏の教えを深く信じ、真実の心をもつて、常に仏を念ずること。以上のことによつて願いに随つて必ず極楽に往生することができる」と説く。次にその理由を示した後、常念仏の効用を説く迦才の説を引用し、総括して、「三業を護るのは止の善、称念は行の善、菩提心と願とは、この二つの善を扶助するものであるから、これらの実践を往生の肝要とする」と述べている。

この教説に基づいて『往生要集』の全体を理解するのが「略」の立場である。法然はまず、上掲二番の問答の中、第一問答を引用した後、問の意を求めて、次のように言う。

私に云ふ、問の意は、上の諸門とは厭離等の五門を指すなり。所陳はすでに多し。厭離に七あり、欣求に十あり、証拠に二あり、正修に五あり、助念に七あり。かくのごとき諸門の中

に、陳ぶるところすでに多し。未だ知らず、何の業をか往生の要となすと問ふなり。<sup>6)</sup>

次いで答の意を釈して、「大菩提心・護三業・深信・至誠・常・念仏・随願」の「七法」を立て、逐一注釈してゆく。「大菩提心」とは、大文第四「正修念仏」の第三「作願門」の教説による。「護三業」とは、大文第五「助念方法」の第四「止悪修善」の教説による。十重四十八輕戒の中では特に十重戒を言う。「深信」は、「助念方法」の第二「修行相貌」所説の四修・三心の中、三心の深心に当たる。「至誠」は、三心の至誠心、「常」は、四修の無間修に当たる。「念仏」は、「正修念仏」の第四「觀察門」の教説によるが、観念ではなく称念を取る。「随願」は、三心の中の回向発願心に当たると言う。その上で、これは「助念門」の意であつて、『往生要集』の正意ではないと主張し、その理由は、正しく念仏すれば持戒等を具足する必要はないからであると述べている。ここまでは「略」の前半である。

ここで議論は一応完結しているが、続いて再び上掲「総結要行」第一問答・第二問答の全文を引用し、法然の私見として、「この第七総結要行とは、これこの集の肝心なり。決定往生の要法なり」と宣言し、さらに検討を重ねてゆく。前半の結論と異なることが主張されているのである。後半部分における法然の解説は次の通りである。

第一問答に、「上の諸門」と言うのは、大文第一―第五の五門を

指す。第一「厭離穢土」には七節、第二「欣求淨土」には十節、第三「極樂証拠」に二節、第四「正修念仏」に五節、第五「助念方法」に六節あつて議論が多岐に亘っているからである。その中の何をもつて往生の要とするのかと問い、第一答においては、要行の大意として大菩提心等の要行を列挙し、第二問答において、第一答の意を釈している。まず五門の中から第四「正修念仏」・第五「助念方法」の二門を選び取つて往生の要行とする。次に第四「正修念仏」の五念門の中から、第三「作願門」・第四「觀察門」の二門を取り、さらに「作願門」においては、事・理の菩提心の中から事を取つて往生の要とし、「觀察門」においては、觀想・称名の念仏の中から称名を取つて往生の至要とする。また第五「助念方法」の六節の中から、第二「修行相貌」と第四「止悪修善」の二節を取り、「修行相貌」においては、四修の中から無間修を取り、三心は全てを取る。「止悪修善」においては、持戒不犯・不起邪見・不生驕慢・不悲不嫉・勇猛精進・誦誦大乘の六法から第一持戒不犯を取つて往生の要とする。戒とは菩薩戒を指し、十重四十八輕戒の中では輕を捨てて十重戒を取る。以上の説明を総括して法然は、次のように述べている。

この要集の意に依つて往生を遂げんと欲する者は、まづ縁事の大菩提心を發し、次に十重の木叉を持ち、深信と至誠とをもつて常に弥陀の名号を称し、願に随つて決定して往生を得。これすなはちこの集の正意なり。……また念仏に二あり。一は但念

仏、前の正修門の意なり、二は助念仏、今の助念門の意なり。

この要集の意は助念仏をもつて決定の業とするか。ただし善導和尚の御意はしからずと<sup>(8)</sup>云々。

前半の結論とは逆に、縁事の大菩提心を發し、十重の戒を持ち、深信・至誠をもつて常に弥陀の名号を称念すれば、願に随つて必ず往生できると説く「総結要行」の立場こそが『往生要集』の正意であると言うのである。

前半と後半の記述に重複がある上に、結論が異なっているので、成立過程を検討する必要がある。後半部分は後世の挿入であるという説が有力であるが、共に法然の言葉であることは確かなので一連の文章として理解すべきだという意見もある。

他の三本の注釈書を見ると、『往生要集略料簡』の「総結要行」釈には前半の見解が提示され、『往生要集論要』では後半の見解、『往生要集料簡』では後半の見解に前半の末尾の文が継ぎ足されている。「総結要行」について様々に語られた法然の法語が断片的に存在し、それが後世に取捨選択されたとか、あるいは原初形態が確定している本に、後世断片が挿入された等々、諸先学が議論を重ねている。<sup>(9)</sup>

前半と後半とを一連の文章として理解するのは困難だと思ふ。後世の増補あるいは編集があつたと考えるべきである。法然は、「総結要行」の評価について、複数の見解を示していたということである。

教理学の立場からすると、前半・後半のどちらを重視すべきかを検討した上で、重視しなかった方の見解をどう解釈するかという手順を踏まなければならない。思うに、後半の方が語句の解釈が詳細である。よって前半は一応の見解、後半は再検討された見解であり、後半を重視すべきだと考える。

右に掲げた後半末尾の結論によると、称名念仏が菩提心等の余行によって扶助されているという立場、すなわち「助念仏」をもって決定業とするのが『往生要集』の正意であると見るのが「略」の読み方であり、これこそが法然の『往生要集』観であると言つてよい。『往生要集』は、余行と称名とを「助・正」の関係と捉え、称名を要とする助念仏を明かした書だと評価したのである。しかしそれは善導の立場とは異なる、つまり「助念仏」は浄土教の正しい理解ではないと言う。前半に、「助念門」は『往生要集』の正意ではないと言つたのは、そういう意味だと思われる。法然は、『往生要集』の念仏と、善導の念仏とは、異なると考えたのである。源信は「略」の立場で『往生要集』を書いたけれども、法然自身は、「略」の立場には従わないということである。そこで次に法然は、「要」の立場を提示する。

## 二 「要」について

法然は『往生要集』理解の第三の立場として、「要」の読み方を

提示する。冒頭に、「三に要とは念仏の一行に約して初進する文これなり<sup>(10)</sup>」と言うように、『往生要集』の中から「念仏の一行」だけを勧める文を抽出し、その文意を探求しようとするのである。その文とは、大文第四「正修念仏」の第四「観察門」、大文第八「念仏証拠」、大文第十「問答料簡」の第二「往生階位」の三文である。

第一に、『往生要集』「正修念仏」の「観察門」には、別相観・総相観・雑略観の次第で、色相観を中心とする観想念仏の組織を示した後、観念に堪えられない者に対して、次のような教説が提示されている。

もし相好を観念するに堪へざるものあらば、あるいは婦命の想到に依り、あるいは引撰の想到に依り、あるいは往生の想到に依りて、一心に称念すべし<sup>(11)</sup>。意業不同なるがゆゑに種々の観を明かす。行住坐臥、語黙作々に、常にこの念をもつて胸の中に在くこと、飢して食を念ふがごとくし、渴して水を追ふがごとくせよ。あるいは頭を低れ手を挙げ、あるいは声を挙げて名を称せよ。外儀は異なりといへども、心念はつねに存ぜよ。念々に相續して、寤寐に忘るることなかれ<sup>(12)</sup>。

源信は極愚の行者に対して、「婦命・引撰・往生」の想念の中で一心に称名念仏せよと言ひ、その一心を説明して、寝ても覚めても一瞬たりとも絶やすことなく仏を念じて称名することであると言う。

法然は「要」の第一に、「観察門」の組織を略示した後、右の全

文を引用している。「略」の末尾に「但念仏」と言っていたのは、この「三想一心称念」の教説を指すと考えてよい。<sup>12)</sup>法然は「觀察門」の論説中に、「一心に称名念仏を相續せよ」という教えを見出したのである。

第二に、『往生要集』「念仏証拠」は、諸行よりも念仏が勝れていることの理由を示す章である。その全文は次の通りである。

大文第八に、念仏証拠とは、問ふ。一切の善業はおのおの利益ありて、おのおの往生を得ん。何のゆゑに唯だ念仏の一門を勧む。答ふ。今念仏を勧むることは、これ余の種々の妙行を遮するにはあらず。ただこれ、男女・貴賤、行住坐臥を簡はず、時処諸縁を論ぜずして、これを修するに難からず、乃至臨終に往生を願求するに、その便宜を得たるは念仏にしかず。ゆゑに『木槵経』（『木槵子経』、『大正蔵』一七、七二六頁上）に云ふ、『難陀国の波瑠璃王、使を遣はして、仏に白して言ふ、へただ願はくは世尊、特に慈愍を垂れて、我に要法を賜ひて、我をして日夜に修行することを得やすく、未来世の中に衆苦を遠離せしめん』と。仏告げて言ふ、へ大王、もし煩惱障・報障を滅せんと欲はば、まさに木槵子一百八を貫きて、もつて常に自ら随へて、もしは行、もしは坐、もしは臥に、恒にまさに心を至して分散の意なく、仏陀・達摩・僧伽の名を称して、すなはち一の木槵子を過ぐすべし。かくのごとくして、もしは十、もしは二十、もしは百、もしは千、乃至百千万せよ。もしよく二十万遍

を満たさば、身心乱れず、諸の諂曲なくんば、命を捨てて第三の炎摩天に生るることを得て、衣食自然にして、常に安樂なることを受けん。もしまたよく一百万遍を満たさば、まさに百八の結業を除断することを得て、生死の流を背きて、涅槃の道に趣き、無上の果を獲べし」と略抄。感禪師またこれに同じ。いはんやまた、もろもろの聖教の中に、多く念仏をもつて往生の業となす。その文、はなはだ多し。略して十の文を出さん。

一には、『占察経』の下巻（『大正蔵』一七、九〇八頁下〜九〇九頁上）に云ふ、「もし人、他方の現在の浄国に生れんと欲はば、まさにかの世界の仏の名字に随ひて、意を専らにして誦念すべし。一心に乱れずして上のごとく觀察せば、決定してかの仏の浄国に生るることを得、善根増長して、すみやかに不退を成ぜん」と上のごとき觀察とは、地藏菩薩の法身及び諸仏の法身は、己が自身と体性平等無二にして、不生不滅なり、常楽我浄なり、功德圓滿せりと觀するなり。また己身無常なること、幻のごとし、厭ふべしと觀する等なり。

二には、『双卷経』の三輩の業（『無量寿経』卷下、『大正蔵』一一、二七二頁中〜下）に、浅深ありといへども、しかも通じてみな云ふ、「一向に専ら無量寿仏を念ぜよ」と。

三には、四十八願の中（同卷上、『大正蔵』一一、二六八頁上）に、念仏門において別に一の願を發して云ふ、「乃至十念せんに、もし生ぜざれば、正覚を取らじ」と。

四には、『観経』（下品下生段取意、『大正蔵』一一、三四六頁

上)に、「極重の悪人は、他の方便なし。ただ仏を称念して、極楽に生ずることを得」と。

五には、同経(『大正蔵』一二、三四三頁中)に云ふ、「もし心を至して西方に生れんと欲はば、先づまさに一の丈六の像の、池の水の上に在りと観ずべし」と。

六には、同経(『大正蔵』一二、三四三頁中)に云ふ、「光明遍く十方世界を照らし、念仏の衆生を、撰取して捨てず」と。

七には、『阿弥陀経』(『大正蔵』一二、三四七頁中)に云ふ、「少善根の福德因縁をもつて、かの国に生ずること得ず。もし善男子・善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持して、もしは一日乃至もしは七日すること、一心に乱れざれば、その人の命終の時に臨みて、阿弥陀仏、諸の聖衆と、その前に現在せん。この人終る時に、心、顛倒せずしてすなはち往生することを得ん」と。

八には、『般舟経』(卷上、『大正蔵』一三、九〇五頁中)に云ふ、「阿弥陀仏の言ふ、へわが国に來生せんと欲はば、常に我を念ぜよ。しばしばまさに念を専らにして休息あることなかれ。かくのごとくせば、我が国に來生することを得ん」と。

九には、『鼓音声経』(『大正蔵』一二、三五二頁中)に云ふ、「もし四衆ありて、よく正しく彼の仏の名号を受持せば、この功德をもつて、終らんとする時に臨みて、阿弥陀、すなはち大衆とこの人の所に往きて、それをして見ることが得しめ、見を

はりて尋いで生ぜん」と。

十には、『往生論』(『浄土論』、『大正蔵』二六、二三一頁中)二三二頁中取意)に、「かの仏の依正の功德を觀念するをもつて、往生の業となす」と已上。

この中に、『觀経』下下品、『阿弥陀経』『鼓音声経』は、ただ名号を念ずるをもつて往生の業となす。いかにいはんや、相好・功德を觀念せんをや。

問ふ。余の行に、いづくんぞ勸信の文なからんや。答ふ。その余の行法は、かの法の種々の功能を明かすによつて、そのなかにおのづから往生の事を説く。ただちに往生の要を弁ずるに、多く「念仏」といふがごとくにあらず。いかにいはんや、仏自らすでに言ふ、「まさにわれを念ずべし」と。また仏の光明、余の行人を撰取すとは云はず。これらの文、分明なり。なんぞかさねて疑をなさんや。

問ふ。諸経の所説は、機に随ひて万品なり。なんぞ管見をもつて一の文を執せんや。答ふ。馬鳴菩薩の『大乘起信論』(『大正蔵』三二、五八九頁上略抄)には、「また次に、衆生初めてこの法を学ぶに、その心怯弱にして、信心成就すべきこと難きことを懼畏して、意に、退せんと欲せば、まさに知るべし、如来に勝方便ありて、信心を撰護す。随ひて心を専らにして仏を念ずる因縁をもつて、願に随ひて、他方の仏土に往生することを得。修多羅に説くがごとし、へもし人専らにして西方の阿

弥陀仏を念じて、所作の善業をもって回向して、かの世界に生れんと願求すれば、すなはち往生することを得」と<sup>③</sup>。明らかに知んぬ、契経に、多く念仏をもって往生の要となす。もしからざれば、四依の菩薩すなはち理尽にあらず<sup>④</sup>。

第一問答では、すべての善業にはそれぞれ利益があつて、その一つひとつが往生の因となるのに、なぜただ念仏の法門だけを勧めるのかと問う。答えて、他の善行を排除するのではないが、念仏は、男女・貴賤、行住坐臥を問わず、容易に行うことができ、また臨終に往生を願うには、最も適した行いだから勧めるのであると云い、念珠を繰りつつ仏法僧の名を称えることを教えた『木椶子経』の文を引用する。『木椶子経』の引文は、善導『観念法門』(『大正蔵』四七、三〇頁上)に掲げられた箇所<sup>⑤</sup>に一致する。

続いて源信は、念仏を往生の業とする十の証文を列挙している。十文の選定は、懷感『群疑論』卷五(『大正蔵』四七、五九頁下、六〇頁上)の記述を参考にしている。そのことは古くから知られていて、良忠『往生要集義記』卷七(『浄土宗全書』一五、三三四頁下)に指摘されている。『群疑論』には、次の九文が掲げられている。

- ①『阿弥陀経』六方証誠の文(『大正蔵』一二、三四七頁中、三四八頁上取意)
- ②『観無量寿経』下三品の文(『大正蔵』一二、三四五頁下、三四六頁上取意)

- ③『観無量寿経』撰取不捨の文(『大正蔵』一二、三四三頁中)
- ④『無量寿経』卷下三輩の文(『大正蔵』一二、二七二頁中、下)

- ⑤『無量寿経』卷上第十八願の文(『大正蔵』一二、二六八頁上取意)

- ⑥『般舟三昧経』卷上常念我名の文(『大正蔵』一三、九〇五頁中)

- ⑦『鼓音声王経』十日念仏の文(『大正蔵』一二、三五二頁中、下)

- ⑧『華嚴経』(六十卷本)卷七念仏三昧の文(『大正蔵』九、四三七頁中)

- ⑨『占察経』卷下当念名号の文(『占察善悪業報経』、『大正蔵』一七、九〇八頁下、九〇九頁上)

これを承けて源信が掲げるのは次の十文である。

第一に、『占察経』卷下に、「浄土に生まれたいと思う者は、その世界の仏の名前を、心を傾けて念じ唱えよ」と説く。

第二に、『無量寿経』卷下に、「三輩往生人の行業全てに共通して、<sup>⑥</sup>「ただひたすら無量寿仏を念ぜよ」と言う。

第三に、『無量寿経』卷上第十八願に、「わずか十念でもしてくれた者が往生できないなら、私は仏の座に就かない」と言う。

第四に、『観無量寿経』に、「極重悪人にはほかに救われる方法はない。ただ仏を称念することによってのみ、極楽に往生することが

できる」と言う。

第五に、『観無量寿経』に、「心の底から西方極楽に生まれたいと思えば、まず一丈六尺の仏像が、池の水の上にあると観念せよ」と言う。

第六に、『観無量寿経』に、「阿弥陀仏の白毫より放たれる光明は、あらゆる世界の念仏する人々を照らし、その救いの光の中に摂め取って決して捨てられない」と言う。

第七に、『阿弥陀経』に、「阿弥陀仏の教えを聞き、その名をしつかりと心に刻んで、一日乃至七日の間、心を乱すことがなければ、臨終来迎を得て往生できる」と言う。

第八に、『般舟三昧経』に、「阿弥陀仏が、（我が国に往生したいと思えば、常に我を念ぜよ）とおっしゃった」と言う。

第九に、『鼓音声王経』に、「阿弥陀仏の名を心に刻んで保持するならば、臨終来迎を得て往生できる」と言う。

第十に、『往生論』に、「阿弥陀仏の姿や極楽の情景に現れた仏の功德を観念することを、往生の因とする」と言う。

以上十文の中、第四・第七・第九は、ただ名号を念ずるだけで往生の因となると説かれる。まして仏の相好や功德を観念するならばなおさらであると言う。

次に二番の問答を設けて、重ねて念仏のみを勧める理由を述べ、最後に『大乘起信論』より、「ひたすら西方極楽の阿弥陀仏を念じ、すべての善業を回向して極楽に往生したいと願えば、即座に往生す

ることができる」と説く文を掲げて、念仏は往生の肝要であると結んでいる。『大乘起信論』の該当箇所への言及は、迦才『浄土論』卷中（『大正蔵』四七、九五頁上）に見える。また元暁の『無量寿経宗要』は、この『大乘起信論』の教説に依拠して著されたものと考えられる<sup>14</sup>。

以上のように源信は、諸師の論述を駆使して、ここに念仏が往生の因であることの文証を列挙したのである。

そのほぼ全文を、法然は「要」の第二に引用し、次のような私見を添えている。

私に云はく、この中に三番の問答あり。初の問の意は見るべし、唯勸の語は正しく上の觀察門の中の行住坐臥等の文を指すと。そのゆゑは、一部の始末を尋ぬるに、勸進することただ觀察門にあり。余の門の処には、全く見えざるところなり。答の中に二義あり。一には難行易行、謂く諸行は修し難く、念仏は修し易し。二に少分多分、謂く諸行は勸進の文甚だ少なく、念仏は諸経に多くこれを勸進す。次の問答の中に、問の意は知んぬべし。答の中に三義あり。一には因明と直弁、謂く諸行は専ら往生のためにはこれを説かず、念仏は専ら往生のために撰んでこれを説く。二には自説と不自説、謂く諸行は阿弥陀如来自らまさにこれを修すべきを説かず、念仏は仏自らまさに我が名を念ずべしと説く。三には撰取と不撰取、謂く諸行は仏光これを撰取せず、念仏は仏光これを撰取す。次の問の意は知んぬべ

し。答の中に一義あり。如来の隨機と四依の理尽、謂く諸行は  
 釈迦如来、衆生の機に随つてこれを説き、念仏は四依の菩薩の  
 理を尽くしてこれを勧む。これすなはちこの集の本意なり。<sup>(15)</sup>

まず第一問に言う「唯だ念仏の一門を勧む」とは、「観察門」の  
 「行住坐臥」の文を指すと述べている。それはこの直前、「要」の第  
 一に引用した、「三想一心称念」の文であり、従つてこの「念仏」  
 は、称名念仏の意である。

続いて法然は、第一答以下の文意を汲みつつ、諸行と念仏とを対  
 比して、念仏だけを勧める根拠を述べてゆく。諸行は難であり勸進  
 の文が少ないが、念仏は易であり勸進の文が多い。諸行は往生だけ  
 の因ではないが、念仏は往生だけの因である。諸行は阿弥陀仏が自  
 ら修せよとは説かれないが、念仏は阿弥陀仏が自ら我が名を念ぜよ  
 と説かれる。諸行は仏の光明に撰取されないが、念仏は仏の光明に  
 撰取される。諸行は釈尊が機に応じて説かれるが、念仏は四依菩薩  
 が理を尽くしてこれを勧める。以上の検討によつて法然は、念仏を  
 指して、「これすなはちこの集の本意なり」と述べ、本項を結んで  
 いる。法然は「念仏証拠」を、専修念仏を勧める文として掲げたと  
 言えよう。

第三に、『往生要集』「往生階位」は、九品往生人の行位を論じつ  
 つ、凡夫往生の根拠を究明する項目である。十二問答よりなるが、  
 法然が注目したのは第九問答の文である。

問ふ。もし凡下の輩もまた往生することを得ば、如何が近代、

彼の国土を求むる者は千万なるも、得ることは一二もなきや。

答ふ。綽和尚(『安樂集』卷上、『大正藏』四七、一二頁上)  
 中(云ふ、「信心深からずして、存することく亡することくなる  
 がゆゑに。信心一ならずして、決定せざるがゆゑに。信心相続  
 せずして、余念間つるがゆゑに。この三、相応せざる者は、往  
 生することあたはざるなり。もし三心を具して往生せざれば、  
 この処あることなからん」と。導和尚(『往生礼讃』、『大正藏』  
 四七、四三九頁中)云ふ、「もしよく上のごとく念々相続して  
 命を畢ふるを期となすものは、十はすなはち十生ず、百はすな  
 はち百生ず。もし専を捨てて雑業を修せんと欲する者は、百に  
 して時に希に一二を得。千にして時に希に三五を得」と云々。上  
 のごとく」と言ふは、礼・讃等の五念門、至誠等の三心、長時等の四修を指すなり。<sup>(16)</sup>

ここに源信は、下輩の凡夫も往生できるはずなのに、往生できる  
 者がほとんどいないのはなぜかと問い、答えて、道綽『安樂集』と  
 善導『往生礼讃』の文を掲げている。道綽は、「信心が不深(『安樂  
 集』では不淳)・不一・不相続だから往生できない。三心が具われ  
 ば往生できる」と言い、善導は、「専修の者は往生できるが、雑修  
 の者は往生できない」と言う。源信は、道綽・善導の意を承けて雑  
 業を斥け、専心相続の念仏を勧めているのである。

法然は「要」の第三として右の全文を引用した後、次のように述  
 べている。

恵心、理を尽くして往生の得否を定むるは、善導・道綽をもつ

て指南とするなり。また処々に多く彼の師の釈を用ふること、これを見るべし。しかればすなはち恵心を用ふるの輩は、必ず道綽・善導に帰すべきなり。これに依つてまづ、綽師の安樂集を披いて、これを覽て、聖道・浄土の二門の仏教を分かち積これを見、次に善導の觀經疏これを見るべし。<sup>(17)</sup>

源信が往生の得否を定めるのは、善導・道綽を指南とする。よつて源信の真意を理解しようとする者は、必ず道綽・善導に帰依し、『安樂集』『觀經疏』を読まなければならぬと言うのである。

「要」は、諸行を捨てて称名念仏を取る、専修念仏を説く書として『往生要集』を読む立場である。これは法然独自の『往生要集』の読み方であり、源信の意を越えて、法然が『往生要集』から見出した浄土教の極意であると言つてよからう。

## おわりに

法然『往生要集釈』に提示された、「広・略・要」それぞれの立場について教理学の立場から検討し、次のような結論に至つた。

『往生要集』は「広」の組織をもつて撰述されている。それは天台学者源信の公式見解と考えてよい。それに対し法然は、「略」の立場すなわち「助念仏」を決定業とするのが『往生要集』の基本姿勢であると評価した。『往生要集』撰述の目的は「略」を提示することだったと法然は考えたのである。ただし「略」の末尾に、「善

導和尚の御意はそうではない」と言い、「要」の中に、「これこそが『往生要集』の本意である」と言うなど、最終的には法然は「要」の立場、すなわち道綽・善導の説く専修念仏の立場で『往生要集』を理解すべきだと考えるようになったことがわかる。

## 註

- (1) 醍醐本『法然上人伝記』（『法然上人伝全集』七七四頁）
- (2) 『法然上人行状絵図』巻六（『法然上人伝全集』二四頁）
- (3) 『拾遺古徳伝』巻三（『法然上人伝全集』五九七頁）
- (4) 『往生要集釈』（『仏教古典叢書』所収『古本漢語燈録』巻六、五六頁）
- (5) 『往生要集』巻中（『大正藏』八四、六六頁下〜六七頁上）
- (6) 『往生要集釈』（『仏教古典叢書』所収『古本漢語燈録』巻六、六頁）
- (7) 『往生要集釈』（『仏教古典叢書』所収『古本漢語燈録』巻六、八頁）
- (8) 『往生要集釈』（『仏教古典叢書』所収『古本漢語燈録』巻六、一〇頁）
- (9) 近年の業績としては、林田康順「法然上人『往生要集』四釈書の研究―助念方法門、総結要行釈をめぐって―」（『法然上人研究』五、一九九六年）、南宏信「法然『往生要集』諸釈書の六義について」（『仏教大学院紀要』三四、二〇〇六年）、南宏信「『往生要集釈』の構成について」（『仏教大学院紀要』三五、二〇〇七年）、高田文英「法然『往生要集』釈書の研究―料簡』『略料簡』を中心に―」（『真宗学』一二九・一三〇、二〇一四年）、下端啓介「法然『往生要集釈』における合・広・略・要の関連性」（『仏教大学院紀要』四八、二〇二〇年）等。
- (10) 『往生要集釈』（『仏教古典叢書』所収『古本漢語燈録』巻六、一〇

（一一頁）

- (11) 『往生要集』卷中（『大正藏』八四、五九頁中）  
 「略」の末尾に見える、「一に但念仏は前の正修門の意なり。二に助念仏は今の助念門の意なり」という文言について、「助念仏」が

「総結要行」の七法を指すことは明白であるが、「但念仏」が具体的に何を指すのか、法然は明言していない。藤堂恭俊氏は、「総結要行」の、「往生之業念仏為本……」の文を指すと言う（藤堂恭俊「浄土宗開創期前後における法然の課題」『法然上人研究』第一巻思想編、山喜房仏書林、一九八三年）。「略」の論述中にその出拠を見出した藤堂氏の見解は尊重すべきである。ただし「但念仏」が「正修門」すなわち「正修念仏」の五念門を指すことは藤堂氏も認めるところである。本稿では、「但念仏」は、「要」の立場で提示された称名念仏を意味すると解し、具体的には「正修念仏」の第四「觀察門」に示された「三想一心称念」を指すと考えた。

- (13) 『往生要集』卷下（『大正藏』八四、七六頁下～七七頁中）  
 梯信暁「元暁の浄土教思想について」『阿卷無量寿経宗要』を中

心として」（三崎良周編『日本・中国 仏教思想とその展開』山喜房仏書林、一九九二年）

- (15) 『往生要集釈』（『仏教古典叢書』所収『古本漢語燈録』卷六、一三～一四頁）

- (16) 『往生要集』卷下（『大正藏』八四、八一頁中）

- (17) 『往生要集釈』（『仏教古典叢書』所収『古本漢語燈録』卷六、一四～一五頁）